

現代小説の教材化と小説の授業に関する生徒の意識調査

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

石川祐爾・鹽谷 健・鈴木信好・須藤 敬

関口隆一・平田知之・福田 孝

現代小説の教材化と小説の授業に関する生徒の意識調査

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

石川祐爾・鹽谷 健・鈴木信好

須藤 敬・関口隆一・平田知之

福田 孝

本校国語科では、14年前に「中・高6ヶ年を見通した教材編成(小説)」を作成し、それに沿って指導、実践してきたが、今年度は、その部分的修正案として、高校3年生で、現代小説「イースト・リバーの蟹」(城山三郎)を扱った。まずその概要と生徒の反応とを報告する。つぎに、上記の報告と関連して、中学3年生と高校3年生を対象に、小説の授業に関する生徒の意識調査を行った。その結果と考察とをあわせて報告する。

「イースト・リバーの蟹」は、高校3年生を対象にした教材としては適切であるという結論を得た。

また、小説に関する生徒の意識としては、①他教材よりも小説教材が好まれること。②小説の授業の「面白さ」として、[自分とは違った友人の感想を聞くことができること]を挙げている高校生が目立った。

キーワード : 城山三郎「イースト・リバーの蟹」

1. はじめに

本校国語科では、1986年度に「中・高6ヶ年を見通した現代国語の教材編成(小説)」を作成、以来それに従って指導・実践・検討を繰り返してきた。これは、

「基本的な読みの要素」という概念を導入して「人物・構成・描写」の3要素を設定し、それによって作品を相関づけようと考えた教材編成であった。(次にそのポイントを示す)

学 年	教 材 名	読みの要素	指 導 の 観 点
中 一	芥川龍之介 「トロッコ」	人物 (構成)	主人公の心理の変化を読みとる。 「あの時」と「今」の関連性を理解する。
中 二	宮沢賢治 「注文の多い料理店」	構成 (描写)	ストーリーの展開の面白さを味わう。 金文字の意味の二重性を理解する。
中 三	森 鴎外 「最後の一句」	描写 (人物)	特徴的な表現に注意して読む。 主人公の心理の変化を読みとる。
高 一	芥川龍之介 「羅生門」	人物 構成	主人公の心理の変化を状況と関連させてとらえる。 作品構成をつかみ、中心的部分をとらえる。
高 二	中島 敦 「山月記」	人物 描写	主人公の内面を読みとる。 文体の効果をつかむ。
高 三	夏目漱石 「こころ」	人物 構成 描写	主人公の内面と人間存在について考える。 作品構成を理解する。 「告白」の心理描写に注目する。

これらの作品は、各学年で、その観点、項目に従って必ず取り扱うこととし、その他の小説教材については、それぞれの学年担当者の裁量で決めてきた。

そのため、授業担当者は、作品ごとによって異なる「基本的な読みの要素」を意識しつつ独自の指導過程を経て、それぞれの作品を扱ってきた。

また、その過程で、そのときどきの担当者によって、いくつかの修正も行われた。(中学3年森鷗外「最後の一句」を魯迅「故郷」に変更など)

さらに、「基本的な読みの要素」という概念の導入は、指導上の指針になったことは事実だが、同時に制約ともなった。「もっと自由に指導したい」という声も強くなってきた。

ところで、この「基本的な読みの要素」という考え方は、小説を読むうえでの手がかりとしての「人物・構成・描写」を意識・強調して、それによって小説の読み方の方法論の意識化を図るといふねらいもあった。

こうして、この「中・高67年を見通した現代国語の教材編成(小説)」は14年間の実践を経てほぼ定着された。

その一方で、こうした観点とは別に、高校3年の「ころ」の「扱いにくさ」が話題になった。それは、

- ・ 全般的な読解力の低下・内容の「隔世感」からくる生徒の関心の低さ
- ・ 長編の一部を読むことからくる達成感の欠如
- ・ 漱石特有の言いまわしに対する違和感
- ・ 「先生」をどう思うか、の話し合いの低調

などの理由からであった。(けれども、生徒の読書離れの実態を見据えて、せめて教室だけでも漱石の作品に触れさせたいとの願いも捨てきれないのであるが。)

そこで試みに、よく教科書に採用されている遠藤周作「沈黙」、大岡昇平「俘虜記」、森鷗外「舞姫」などの作品を扱ってみたが、授業後の生徒のアンケートからはこちらの満足のいく数字やコメントは浮かび上がって来なかった。

今年度は、試行的に、従来の「基本的な読みの要素」にとらわれずに自由に教材を選び、高校3年は現代小説の城山三郎「イースト・リバーの蟹」(新潮文庫)を取り上げてみた。かなり良好な結果を得られたので、ここにそのあらましを述べたい。

2. どんな小説か

「日本屈指の総合商社で副社長にまで昇りながら、

男は権力抗争を潔しとせず、マンハッタンをのぞむ高層住宅に『引退』した。10ヶ月後、日本から吹き込んできた一陣の風。ライバルだった現社長の急死。男を社長に、と色めきたつ元部下たち。その時、男は一。ほろ苦い諦めや悔やみきれぬ過去、くすぶり続ける野心を胸に秘め、日本を遠く離れた男たちが、異境に織りなす人生模様」

これが文庫本「イースト・リバーの蟹」の裏表紙の内容紹介文である。

「男」の名は「岩堀」、「元部下」の名は「小野寺」で、作品はこのふたりの自分の思惑を通そうとする「対決」と、娘の結婚話にまつわる岩堀の苦渋との二層の物語で構成されている。

小野寺は、現社長の急死の報とともに、その東京での葬儀に、岩堀の列席を求めて彼を訪れる。彼の来意は明白で、葬儀への列席によって「岩堀新社長」への名乗りを挙げ、その運動を開始しようというものだ。

一方の岩堀は、べとべとした人間関係が生理的に嫌い、仕事は仕事と割り切るいわゆる商社マンらしくない男で、一度引退したのだから今さらのこのご物欲しげな顔をして東京に戻りたくないと言ひ張る。「東京に帰ってください」の要請と、「いや、行かない」という切迫したやりとりの中で、年長者の余裕を示しながらも、その心理は微妙に揺れる。

彼は、小野寺の全力を尽くした説得、「わたしたちは副社長を慕って、同じエレベーターに乗り合わせてきました。上るのもいっしょなら奈落の底へ落ちるときもいっしょ。下りとわかって、みんなが次々と降りて行っても乗り続けてきました」や「副社長、おねがいします。ぜひぜひわたしといっしょにご帰国を」に腰が浮きそうになるのをこらえる。

岩堀の本心は、社長の座に執心がないわけではなく、自分から名乗りを挙げて抗争に加わりたくないだけで、社員や株主の多くが推してくれば考え直してもいい、出馬してもいいと思っている。というよりも、そういう形で出馬したい。——これが本心であったことに、小野寺が去ってから岩堀自身気づかされた。気づいたときはすでに手遅れで、それを伝えたい相手はいない。この、よくある人生模様。この「苦さ」は、アメリカ人の男との結婚を電話で伝える娘の言葉「はっきり言ってくればよかったのに、(日本人と結婚してほしい)もうおそいわ。わたしの中にはもうベイビーが居るんですもの」にも通底する。

ところで、岩堀は、自分の本心の在処をどのようにして気づいたのか。

ひとつは、ほかならぬ小野寺の40日前のプレゼントから。彼はプロゴルファー、トム・ワトソンのサインを通して、「欲望を持ちなさい」「野心を」と語りかける。この「40日前」という事実に変更して思い至り、岩堀は元部下から衷心から慕われていたことを知る。彼は、社長が死んでからはじめて岩堀を後継者にと動き出したのではなく、ずっと前からオレを慕っていたのだ、とようやくわかった。

ふたつ目は妻の園子の態度や言葉から。小野寺の来意を察した彼女は、いそいそと酒の肴づくりを始める。一方で「社長と副社長との間には、山の頂と麓ほどのちがいがあそうね。」などと言って岩堀を揺さぶる。「あなた、ほんとに社長になりたくありませんの」さらに、「たとえ明日いっしょに帰国できなくても、社長になる、なりたいたい一言おっしゃれば、様子はちがったのではないかしら」と、泣いて帰った小野寺をいたわりつつ岩堀を責め、「少なくともあのひとは泣いたりしないで希望を持って帰ったわ」と、岩堀が彼の希望までも奪ってしまったと重ねて責めたてる。

そこで、岩堀は、はじめて（ようやく）「たとえ明日発てなくても、決定的な『ノー』は取り消す。はじめから希望を絶つことはない。岩堀は体の中が熱くなるのを感じる」と自分から動き出そうと意欲的になる。

しかし、まったく皮肉なことに動き出そうと思ったまさしくその直後にかかってきた電話（一度は、それが小野寺からの再度の依頼ではないかとの期待を持った電話）で、娘から手痛い言葉をぶつけられる。蟹、マンハッタン夜景も、また電話機までもがつまらない、味気ないものに見えてくる。元部下や妻に揺り動かされてようやく自身から動き出そうと決めた矢先の、その第一歩になるかに思えたコール音。けれどもそれは娘からの、結婚を伝えるつらい知らせで、依然としてさっきの味気なさは残ったまま。もうもとへは戻れない。やり直しはきかないのだ。

3. 教材としての「イースト・リバーの蟹」

学習指導要領に「文学的文章について、人物、情景、心情などを的確にとらえ、表現を味わうこと」とあり、また「人物の生き方やその表現の仕方などについて話し合う」ともある。この背後には、読書意欲の喚起、読書力を高めようとの配慮もうかがえる。

この小説は、短編で完結している（文庫本で33ページ）表現も平易で「エレベーター」や「蟹」「電話機」の比喩が、日常の言語生活の場面で効果的に用いられ

ている。商社マンの世界は高校生からは縁遠いものだが、その「速さ」がかえって自己を照射する際の相対化・余裕を生むのではないか（岩堀の心理の変化を、自分自身の場合に引きつけて考えるとき）と予想した。

- ① 表現・内容ともに平易で、理解しやすい短編である。背後の、歴史的事実の理解や、前提となっている宗教上の知識などを必要としない。（「小説の読み方」を意識させるうえで、「内容」が重荷・負担にならない。）
- ② 構成が明解なので、作者の意図がとらえやすい。小野寺とのやりとりを「主」、由美の結婚を「従」ととらえると、この両者に共通するテーマが読みとりやすくなる。
- ③ 巧みな表現パターンに触れることができる。「蟹」「エレベーター」「電話機」など、日常の身近なものによる比喩表現の効果や、細部のさりげないそれでいてリアリティに豊かな表現が多い。（作者の練達した表現技巧に触れることができる。）
- ④ ストーリーの展開に意外性がある。岩堀は終始、小野寺の要請を拒んでいるかに見えて、実はそうではないということに気づくとこの小説の「深さ」「リアリティ」といった面白さに一歩近づくことができる。
- ⑤ 登場人物への共感が、余裕をもってできる。商社マンの世界は高校3年生には無縁のものだが、それが逆に、自己を投影する際に余裕をもたらす。また、具体的には、親や教師の意見に反発しつつも、自分の考えを強く打ち出すことに自信が持てないといった高校生の実態としての心理の揺れと、「岩堀」のそれとを対象化（対照化）して読み進めていくことができる。
- ⑥ 主人公の考え方や行動パターンに対して、自分なりの感想を持つことが容易である。教訓的に読む生徒もいるが、そうした読み物からは遠くにいる日常を思えば、それもまた有用かも知れない。

4. 授業の進め方

- ① 全文のコピーを配布。音読。「小説の読み方」の総まとめとして「方法論」を意識しながら進めていくことを説明。
- ② 小説の「面白さ」とは何か。（資料1「文学理論の研究」より）この小説の「面白さ」は何か。（教師の解説と生徒の感想の発表）
- ③ 岩堀の心理の変化を追う。「どこで、なぜ、どのよ

うに、変化したか」を確認してゆくことを伝える。各授業の前半は、教師と生徒のやりとりで（発問・指名・発表）内容の確認をし、後半は、それをもとにして各自の「読み」を（自分がどう読んだかを）B5 半分の紙にまとめて提出、それを次時までに教師が目を通し、コメントと評価を添えて返却。そのときに、良好な文章のサンプルを印刷して配り、その書き手に音読させる。この流れの繰り返しで進めた。

- ④ まとめは文庫本の「解説」（資料2）の一部をコピーして配布。そこにある「鮮やかな効果音」についてまとめさせた。

5. 授業の様子

< 第一のクライマックス >

- a 小野寺が答えるまでに、わずかだが時間があつた。それは岩堀の胸にこたえる時間であつた。

この「胸にこたえる」の意味でつまずいた。ここは「彼のひとことが胸にこたえた」のように「（衝撃を受けて）強く感じる」の意のはず。なのに「小野寺が岩堀の思っていることに応じる」の意で読んでいる生徒がいた。そこで、すぐ後の「この大事な用件を話し合うのに、スコッチが適当かどうか。その迷いが小野寺の答えをおくらせた」に注目させる。この小説の視点人物は岩堀だから、この文は岩堀が「答えをおくらせたと思った」と読みとれる。

つまり、小野寺の迷い（スコッチかビールか）が岩堀の胸にこたえたと読むべきなのだ。さらに、「小野寺はまばたきして言った」の「まばたき」は何を意味しているかを問うて、そこから彼の不本意、作為、譲歩を見てとっている岩堀が描かれていることに気づかせる。

たかが酒を決めるだけのことで迷う小野寺。それが岩堀には小さな圧力に感じられる。だからその圧力をはねかえそうと「そうでもないだろう。」「本当のことを言ってみろ」と反発したくなる。

「副社長、ほんとおねがいします」

- b 小野寺は声をふりしぼり、また頭を下げた。岩堀は腰が浮きそうになるのをこらえた。

「しかし、やっぱり無理だね」「副社長」と呼ぶ

ことを許した岩堀は、小野寺の必死の懇願に「腰が浮きそうになる」ものの踏みとどまる。

- c 「一線を——」退いた身といいかけるのをのみこみ、「一線を画す身なんだから」

と言い直す。これは、自分の今の立場をより正確に述べようとしたのだろうが、その意に反して図らずも「退いた身」よりも「画す身」の方が”社長復帰”に近いところにいる、いや出馬してもいいという気はあるという本心をさらしてしまっている、とも読める。（ただ、小野寺はこのことに気づいてはいない。）

—— a・b・cから読みとれる

岩堀の心理をまとめた生徒作文例 ——

aで、小野寺が本気で説得に来ていることを知った岩堀は、「自分からは動きたくない」性格上、そういう話はしたくなかった。が、小野寺の必死の頼みに相手の意見に従いそうになるのを、無理して突っぱねようとして、最後にはほとんど心理的に負け、説得を受け入れ始めていた。しかし、「今夜限り」「一線を画す」などに表れているように「自分からは動けない性格」が歯止めとなり、かろうじて小野寺から逃げ切っている。（3組 藤田）

aで岩堀は、小野寺の気持ちを察して、動いてやれないことをつらく感じるというように、心理が小野寺側に流れている。それが「本当のことをいってみろ」ではaで崩れかけた体勢を立て直そうとして、心理が逆に反小野寺側に大きく揺れた。

その後、「仕方がない、今夜限りだよ」では、また相手を受け入れて、心理も小野寺側に戻ってきた。そうした後のbなので、ここでは小野寺が必死で頼むのをきいて、岩堀の心理は大きく小野寺側に流れ、「腰がうきそうになる」というたとえがあるように「わかった。行くよ。」と返事をしそうになるまできたが、それでも行きたくないという気持ちがそれをおさえ、結局は、「きみの気持ちはわかるけど行かないよ」という返事につながったと考えられる。（1組 北村）

岩堀は小野寺のちょっとした沈黙で、小野寺の言おうとしている自分の欠点を悟り、直接言われてないし、それが正論なのでよけいに胸にこたえ、それに対する反発のため、ちょっと皮肉ったり強く相手に迫ったりしている。まんざらその気がなくはないので、b小野寺を受け入れ始めるが、はじめに断るつもりでいたのが説得に動揺して腰が浮きそうになり、それをこらえて「やっぱり無理」といい、一線を退いた身というのを「一線を画す」と言い直すなど、未練も残したりしていて、気持ちを二転三転させている。(3組 義永)

組 鎌形)

岩堀が引退するずっと以前から社長になってもらおうと支え続け、引退した後もその希望を捨てずになんとか社長になってもらおうとワトソンの言葉を使ってみたりし続けていた小野寺が、最後の望みを託してやってきたのに、自分のちっぽけなメンツを優先して、小野寺にとってはとても残酷な言葉を与えてしまったということを園子によって気づかされ、あらためて小野寺の自分に対する献身を思い出したとき、その希望を奪ってしまっはいけないと思直した。(2組 酒田)

< 第二のクライマックス >

(小野寺にとどめを刺したはずが、「もう一度会って話そう」に変化したのはなぜか)。

- a 小野寺との別れ。「岩堀には一瞬(エレベーターが)奈落まで落ちて行きそうな気がした」
- b 園子の「あなた、ほんとに社長になりたくありませんの」「あなたはそういう人なのね」「あのひとは泣いたりしないで、希望を持って帰ったわ」
- c ワトソンの言葉とそれに込められた小野寺の思いなどからまとめる。

—— a・b・cから岩堀の「変化」の理由をまとめた生徒作文例 ——

冗談もこめた「いっしょには下りないからね」に小野寺にかたい表情で「結構です」と答えられたことによって、今まで自分のことしか考えず、自分の考えを押しつけていた岩堀の胸に、何か引っかかるものが生じ、園子の言葉で、自分は今まで小野寺の気持ちは全く考えず自己中心的であったために彼の希望まで奪ったことに気づく。そして40日前のプレゼントを思い出し、彼は上田社長が亡くなる前から自分に社長になってほしかったのだということに気づく。そしてそのプレゼントの文句から、自分は「欲望」がないことを理由に社長の座を断ったが「欲望」こそすべての始まりと気づかされた。(1

今まであった欲やプライドを世間体のために抑えたという意識が、園子の言葉ではっきり認識させられてしまい、小野寺との会話の中で、どういうことを言ったか思い出している際に、ゴルフの話題がなかったことに行き着いて、小野寺にもらったワトソンの言葉を思い出し、その内容がワトソンの言葉というよりもまぎれもなく小野寺の「欲を持って」という自分への希望であったことに気づく。そしてそんなにも以前から自分を慕ってくれていたことがわかった。ここで自分さえ欲をもてば、自分の希望だけでなく、小野寺の期待にも応えられるという要素がそろい、決定的な「ノー」を取り消そうと思った。(2組 萩谷)

6. 「蟹のイメージ」のまとめ

さて、岩堀の心理の変化の様子とその根拠をとらえたところで、本文に即した読みを終え、文庫本解説(佐高 信)資料2の一部をコピー、配布して全体のまとめとした。このとき、解説文中の「蟹のイメージが鮮やかな効果音になっている」に注目し、これについてまとめさせた。その作文例。

まず、料理されて出てきた場面では、「やわらかな色」とか「きれいに並んで」という描写を使い、また、小野寺の「味といい、やわらかさといい 社群」という言葉から、生き活きとしたイメージを表現している。

が、小野寺が帰った後の場面では、「冷えて」「ぼらばら」「どす黒く変色」「醜い死体」などと活力を失っている雰囲気を実に表している。この蟹のイメージは、岩堀の気持ち、場面の状況と照らし合わされており、前半部分では、小野寺の活気、園子の浮き浮きする気持ちなどを彩っており後半部分では、園子の冷めた気持ち、岩堀の「社長の座」と「娘に対する中途半端な態度」への後悔の念で暗い気持ちになった場面の象徴的存在となっている。(1組 大久保)

蟹の描写は、岩堀の心理変化を見事に表している。はじめの部分では、あらかじめいた彼の目に再び社長のイスがちらつき始め、小野寺との切迫した流動的な会話、岩堀の心の揺れ、全体として動きが活発なこの場面を生き生きとした蟹で描写している。うしろはそれとは対照的である。絶望し、手の打ちようがなくただ電話を待つのみになるほど変わる気配のないムードを冷めた醜い蟹で表している。

また、蟹の描写は場の短時間での変化をよく表している。急転直下で立場の急降下する岩堀の様子を表すとき、同じように短時間で質が落ちる描写対象が必要となる。このような条件を考えれば話に無理なくしかもすぐに冷めてしまうようななまものである蟹を描写することは、状況を際立たせる効果音にふさわしくすばらしい。(4組 館野)

この作品は高校3年の教材として適当か(生徒アンケートより)

最後に、この小説は高校3年生の教材として適当か、そうではないか、およびその理由を問うた。その際、全国的定番教材といえる「こころ」や「舞姫」などではなく、新しい試みとしてこの小説を扱って来た由の説明を加えた。

<適当> 73%

- ・ 洗練された文章の裏の深さや今後の展開を考えられる。読み応えがある。巧妙に他の部分とリンクしている。23% (37人)
- ・ リアルなネガティブな心理描写、小説特有な表現が面白い。15% (24人)

- ・ 内容も感性も現代的なのでわかりやすく、とっつきやすい。11% (18人)
- ・ 社会の裏話のようで、卒業をひかえる僕たちにふさわしい。自分の将来の「決断」の判断材料の一助になりそう。教訓になった。6% (10人)
- ・ 自分も岩堀に似ているところがあるので共感できた。気持ち悪いほど岩堀の視点に同化できる。4% (6人)
- ・ 完結していて原因と結果がつかみやすい。3% (4人)
- ・ 現代の心理や世相が出ている。教科書に載せてもいい。2%
- ・ 自分では見つけられないような隠れた名作を教材として、広い視野を得られた。マンネリ化したものよりも目新しく良かった。
- ・ 大好き。「哀愁の情」「苦さ」がいい。
- ・ 目の覚めるような小説だった。これほど微妙な心理の変化を日本語で伝えられることに驚いた。これに気づいたおかげで、他のどの文章にも筆者や作者の言いたいこと、伝えたいことがあるのだと思えるようになり、それを読みとろうとするようになると思う。
- ・ 男女関係に通じるものがあり、理解しやすい。なにより澄んでいて面白く、授業でいくつかの発見があった。
- ・ 小説の読解は主観ではないことがわかった。
- ・ 授業を実際にやって、わかりにくいところ、わかっていないところがクラス全体としてもいろいろあった。
- ・ 久しぶりに普通の小説を授業で読めたのはうれしい。普段の生活で、このような普通の小説を読むことが多いので授業でこのような普通の小説の読み方を教えてくれると非常に役に立ちそうな実践的な技術を身につけることができるのは良いことだと思う。
- ・ このように何でも拒否する性格は、そう簡単に理解できるものではないと思うので、高校3年生ぐらいが適当。
- ・ 漱石を高校生の精神年齢で理解できるかは疑問だ。

<適当ではない> 25%

- ・ つまらない。内容が大人すぎる。狭すぎる。生ぬるい。10% (16人)
- ・ 有名な作家の作品でないので、読んでも教養とな

- らない。4% (6人)
- ・ 漱石などの昔の難しい文章を読んだほうが読解力が増すと思う。時代を超えて読み継がれているものは、それなりの力を持っているはずでそういうものを読むべき。2%
- ・ 大学受験を考えると適当とは言えない。(論説文のほうがいい) 2%
- ・ やさしすぎる。中学3年か高校1年レベルだ。2%
- ・ 現代社会に対して嫌気がさしてくる。暗い。もっとほのぼのとしたものがある。
- ・ 人間関係がねっとりしていて気持ち悪い。
- ・ 自分と同年代の登場人物の方が良い。
- ・ 「ころ」「人間失格」「罪と罰」のような追いつめられた人間の心理がよく描かれた文学が好き。
- ・ 小説として、表現におぼれているところがある。
- ・ テーマ、内容ともに人の心を動かすようなモノではない。僕らの知的好奇心を満足させるには少々役不足であると言わざるを得ない。
- ・ 「六十代」「商社」「アッパークラス」の世界を受け付けられない人が多いのではないかと。私は「アッパークラス」の要素に嫌悪感をもった。

7. 評価について

期末テスト(資料3)の二問について、考察した。

問八の「一線を退く」と「一線を画す」の意味の違いは、90%の正解だった。が言い換えた理由では、正答66%、誤答18%、△(部分点)16%とできが悪かった。この正解例としては「小野寺の懇願に動揺したので、そのことを気づかれまいと、実態より強い言い方の”退く”を使いそうになったが、思い直して立場を正確に示して、小野寺に向かおうとしたから。」と「社長への意欲がないわけではないので、”退く”ではそれが表せず、そのためやや可能性の残る”画す”と言い換えた」の二通りを想定していた。しかし、実際は前者のパターンは0(ゼロ)で、ほとんどが後者だった。

問十五の「ふっと気づくこと」とはどのようなことですか、の解答率はaが54%、bが3%、cが37%、dが6%だった。授業では、この部分は深く扱わずに「ゴルフの話をしなかったことで明るくなる、とはち

よっとわかりにくいね」と軽く触れる程度で出題してみた。この問いに限れば、「a」を正解とすべきなのは明白だ。それは傍線直後の「それはごくつまらぬことであつたが」からハッキリしている。ではなぜ「明るく」になったのか。実は、この問いに対する明確な解答は出せないまま出題してしまった。これに関連して、問十六の正解として「小野寺たちにとっては、願ってもない文句、たのんで書いてもらったような文句ではないか」の文を想定していたが、そう答えたのは37%で、出題者の意図が不分明な欠陥問題であった。

あらためてこの部分を読み返してみると、岩堀は、妻からの「あなたはそういうひとなのね」「少なくともあのひとは泣いたりしないで、希望を持って帰ったわ」という指摘で、自分が小野寺の希望まで奪ってしまったことを思い知らされる。茫然自失、血が薄くなっていく気がする。つらい思いで先ほどの会話を思い起こしてみると、ふといつも出るはずのゴルフの話題がなかったことに気づく。いつもと違って今夜はふたりともかなり緊張、エキサイトしていたな、——そう思うと少し気分も落ち着き自分を立て直すことができ、かすかに明るさを取り戻す。ということではないだろうか。

この他にももう少し検討を重ねたほうが良いと思われる設問もあり、今後の課題として残っている。

8. 授業後の感想

この小説は「週刊宝石」に発表された。読者層は中年サラリーマンであろう。副社長を勤め上げた男の苦渋を描き、共感を得ようとしたものか。それを前途ある高校生に、しかも教室で読ませる。巷間、評価の定まった作品というわけでもない。当初は若干の心配もあったが、一方で、「ごくありふれた普通の小説」という印象が生徒の抵抗感をなくし、読み進めるうちに気づいてくる「岩堀」の微妙な心理の変化に引きつけられるのではないかと——という予想はほぼ当たって、かなり緊張感のある授業になった。

また、具体的な描写の意味を確認する過程で、「ここをどう読むか」という発問に対して、対立する二通りの解釈が出てきて、その検討に時間をとった。そのことで自分だけの読みでは得られない、もう一步踏み込んだ解釈ができ、その(大きさにいえば)「達成感」が授業・小説の両方を「面白い」と感じられるようにしたと思う。(たとえば、前述の「胸にこたえる」の意味や「腰が浮きそうになるのをこらえた」で、同行を

承諾しそうになると読むのか、単に、「もうやめてくれよ」と「小野寺」を制そうとしていると読むのか、など)

さらに、「蟹」・「エレベーター」・「マンハッタンの夜景」などの描写とそれに関わる人物の心理の、不即不離の微妙な、しかし効果的な表現は、評論にはない小説特有のもので、その読みとりの方法は他の作品を読むときにも応用可能だろう。

授業の進め方としては、主人公の心理の変化を中心に、いわば「意味の密集している部分」の具体的な読みの確認をするといったごくありふれた過程をとった。

そのため、内容そのものの解釈に重点がおかれ、読解の過程そのものを客観視しなければ得られない「方法論の意識化」ができなかった。(参考書に項目分けしてまとめられているように「小説の読み方」として一般論を示しても個々の作品にあてはまるわけではないので、教室では扱わなかった。)

またこの小説の「構成」に注目して、そこから作者の意図に迫るという過程もとらなかった。(本校の「教材編成」の「基本的な読みの要素」を意識しなかった)これは時間的な余裕がなくなってしまったためだが、他日、機会を設けてそのようなアプローチも試みてみたいと思っている。

結局、平凡な結論だが、具体的な作品の的確な読みこそが作品の面白さに迫る唯一の方法であるとすれば、授業の流れそのものが暗々裡にその「方法論」を示していたのではないか、と思いたい。(という淡い期待は残った。)

ところで、現代小説を教室で読むときの一番の不安

は、先行する研究論文や解説書がないことだ。そのために、授業者自身の解釈がナマのまま表面に出る。というより出さざるをえないためどうしても消極的になりがちだ。けれども授業者は失敗をおそれずにもっと柔軟に教材を選定してもよいのではないだろうか。

ただ、その場合の第一条件は、授業者のその作品に対する強い、深い感動(面白い、よくわかる、すごい、うまい)だろう。「こころ」や「舞姫」にそれがあるだろうか。)

数十年も前の教育実習のときの指導教官の助言を思い出す。「きみが面白いと思うものを教材に選びなさい」。教室ではその「面白さ」を伝えようとすればいいのだから「目標」も立てやすくなる。それよりもなにより教師自身にやる気が起きる。やり甲斐が感じられる。

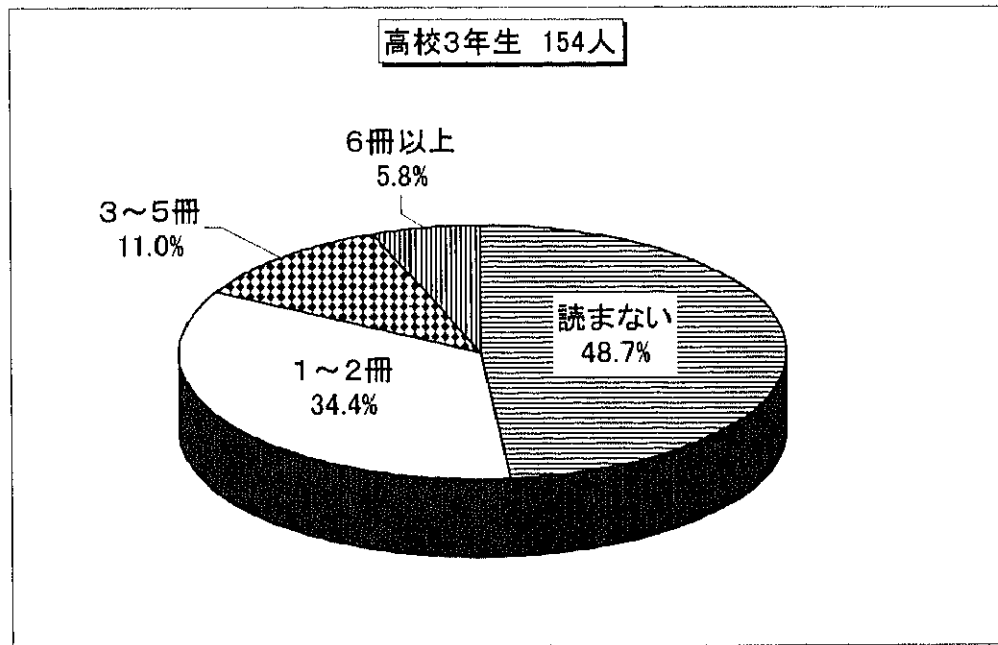
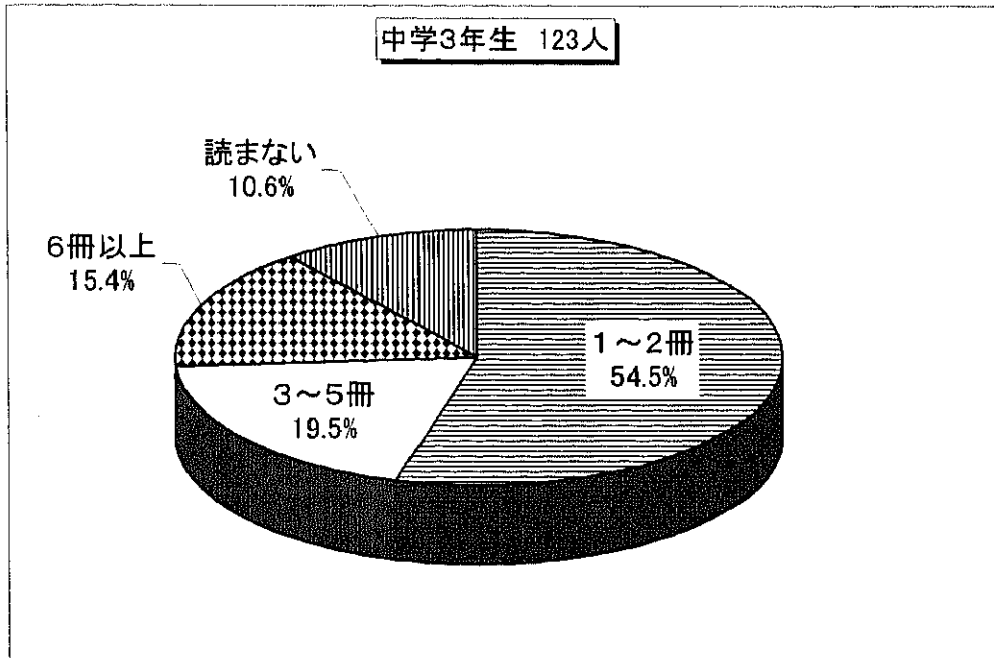
自分の「読み」に十分な自信が持たなくても、少なくとも生徒よりは「読みの経験者」であることは確かなのだから、こうだと断定できるところではそうするし、あいまいな部分はそのようにありのままを伝えればよいのではないか。

しかし、そう考える一方で、「こころ」や「舞姫」といった定番作品をまったく扱わなくてもいいのか、「教師の感動を最優先する」ことは、生徒の今後を無視した手前勝手に無責任な態度ではないかという声も聞かえる。今後、ほとんどの生徒は自分でこれらの作品を読むことはしないだろう。ならばせめて教室で指導者のいるときに読ませたい——という意見もあることを付記しておきたい。

<小説の授業に関する生徒の意識調査>

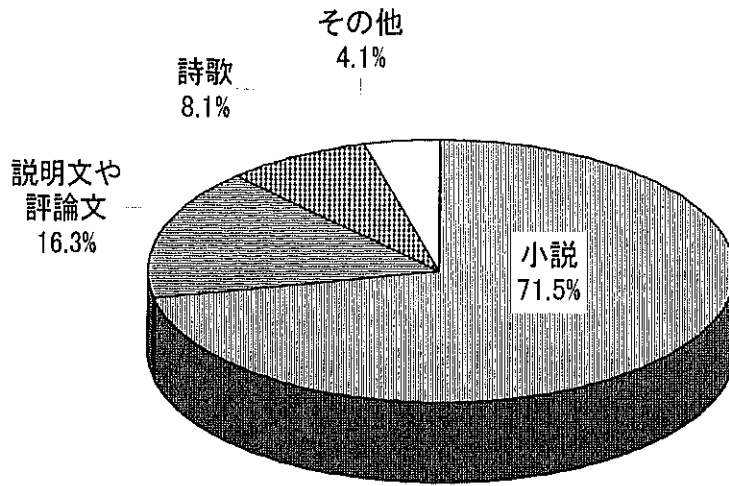
— 生徒アンケート結果 —

1ヶ月に何冊（小説のみ）読みますか

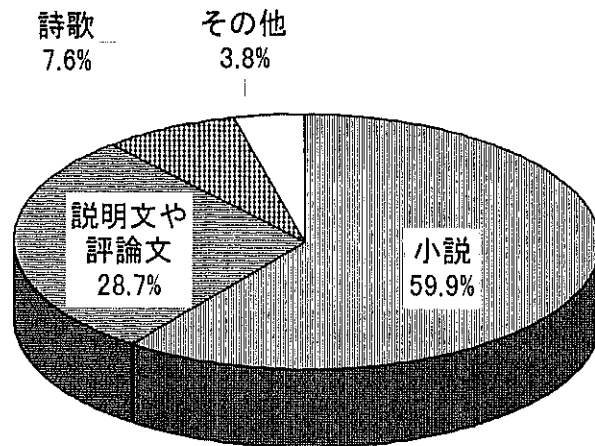


教室で読むもので、最も興味のあるものは何ですか

中学3年生 123人

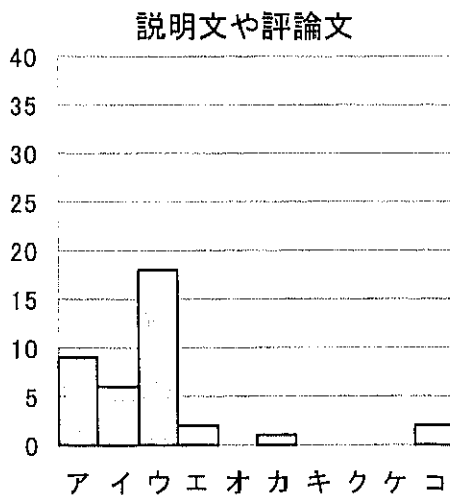
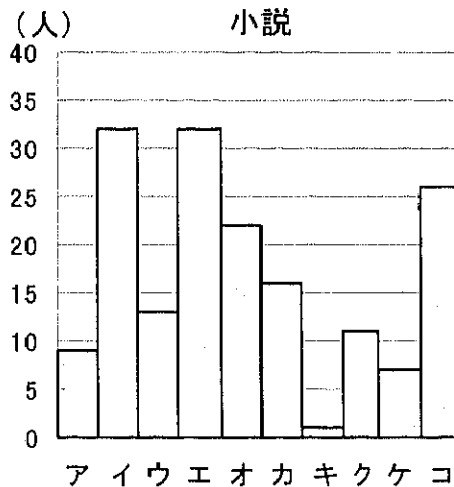
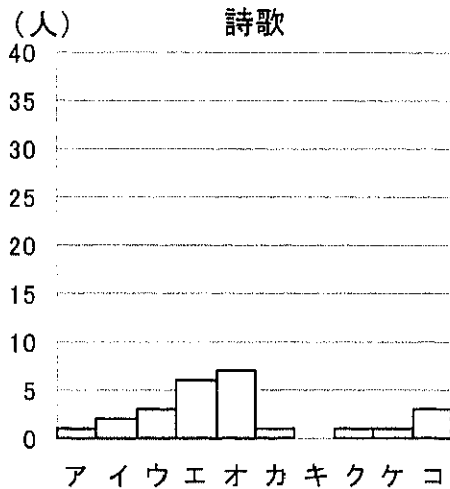
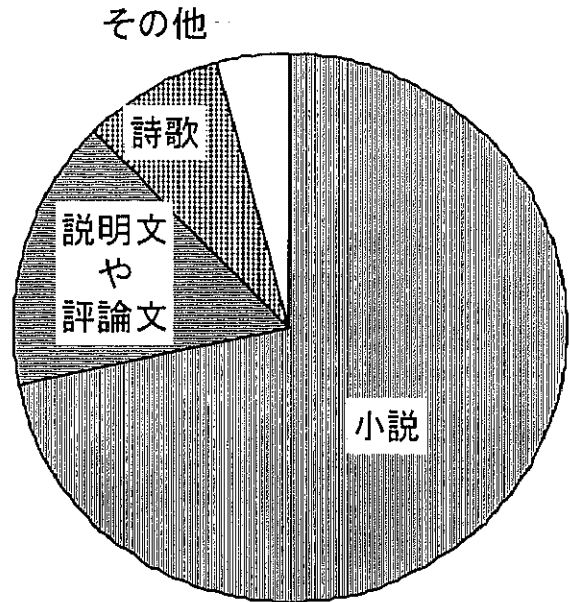
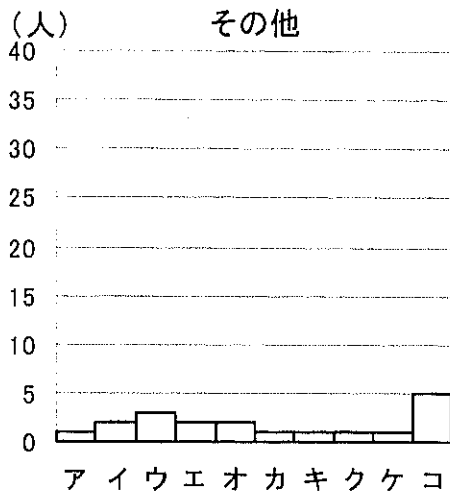


高校3年生 154人



それを選んだ理由は何ですか（複数選択可）

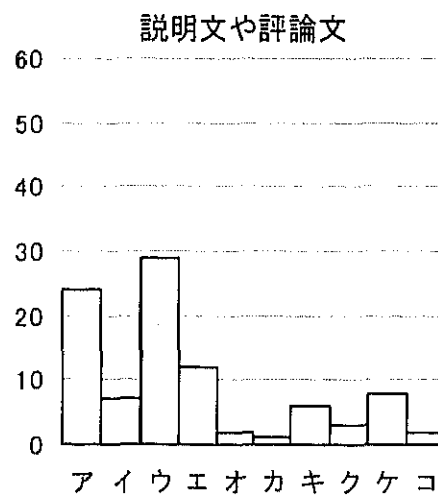
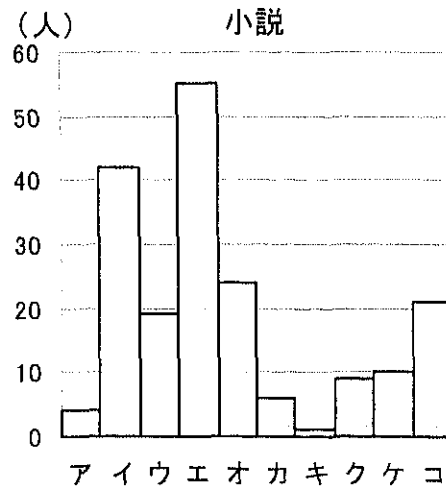
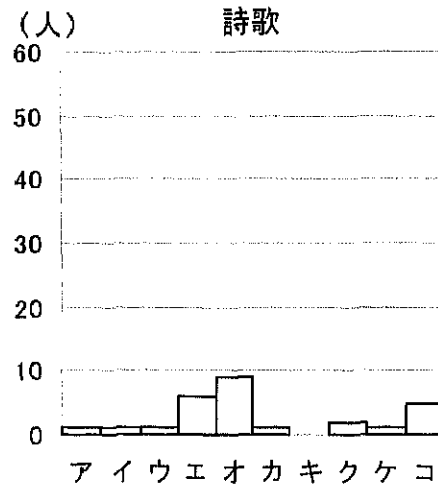
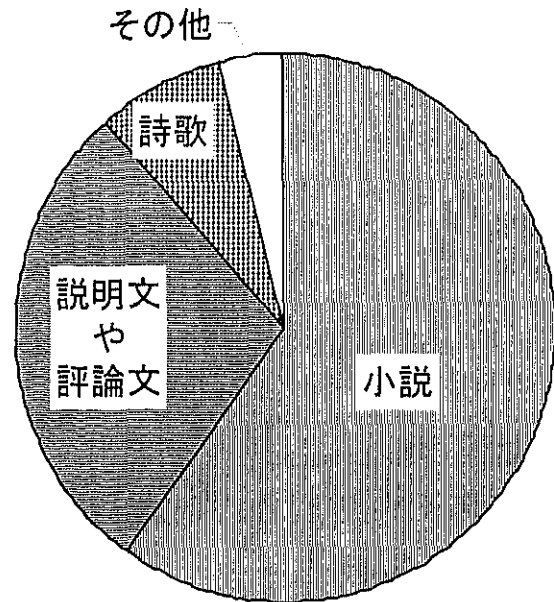
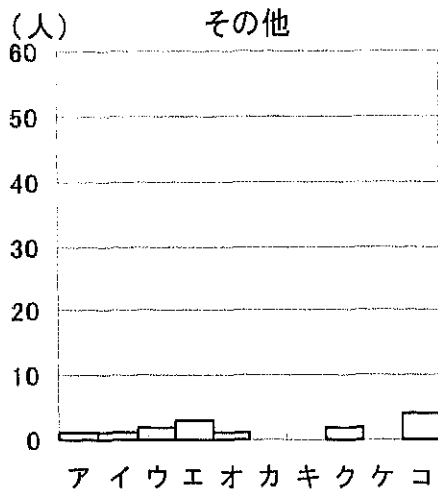
中学3年生 123人



- ア、論理的・抽象的で、客観性があるから。
- イ、具体的・実感的で共感しやすいから。
- ウ、社会や文化などの新知識・考え方が得られるから。
- エ、人間や自分について内省的に考えることができるから。
- オ、美しい言語表現を味わうことができるから。
- カ、有名な文学者や作品についての知識が得られるから。
- キ、大学入試に役立つから。
- ク、友達の意見や感想を聞くことができるから。
- ケ、先生の説明や解釈が役に立つから。
- コ、その他

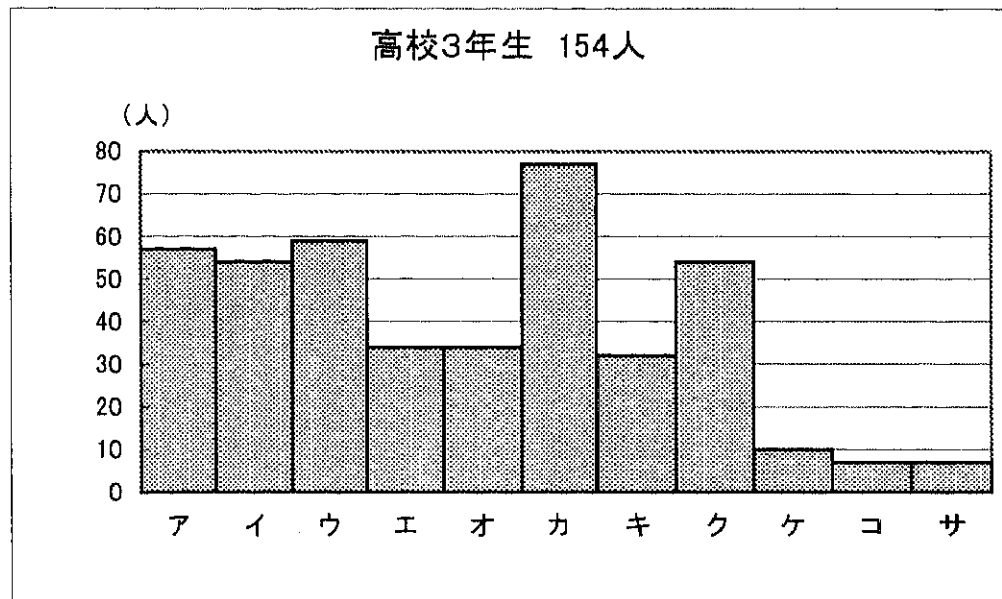
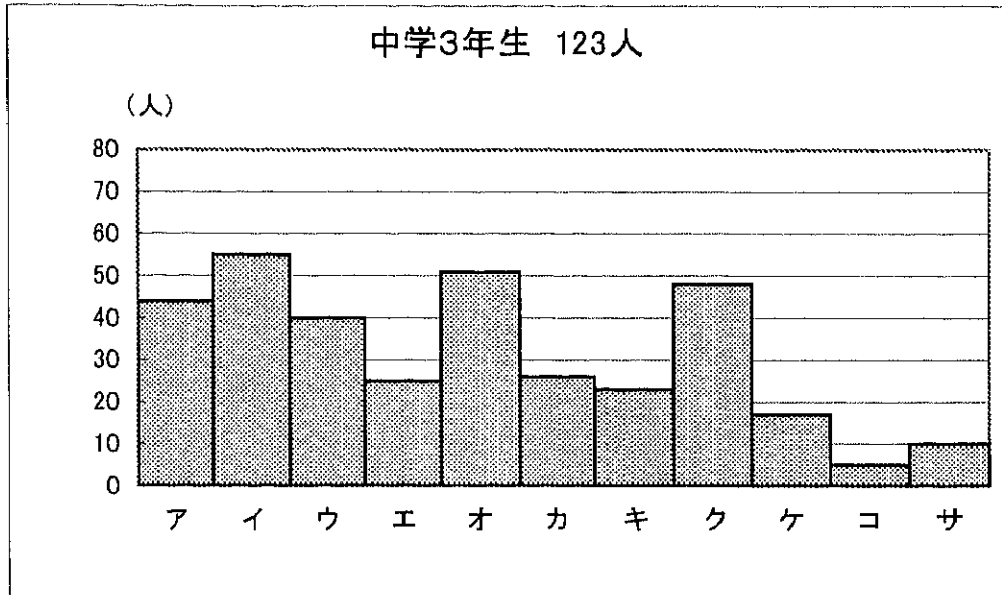
それを選んだ理由は何ですか（複数選択可）

高校3年生 154人



- ア、論理的・抽象的で、客観性があるから。
- イ、具体的・実感的で共感しやすいから。
- ウ、社会や文化などの新知識・考え方が得られるから。
- エ、人間や自分について内省的に考えることができるから。
- オ、美しい言語表現を味わうことができるから。
- カ、有名な文学者や作品についての知識が得られるから。
- キ、大学入試に役立つから。
- ク、友達の見解や感想を聞くことができるから。
- ケ、先生の説明や解釈が役に立つから。
- コ、その他

国語の授業で小説を読むことの意義（目的）は何だと思えますか



ア、人生や人間について広く、深く考えることができる。

イ、筋の展開や結末を楽しむことができる。

ウ、巧みな表現や美しい表現を味わうことができる。

エ、社会・人間・人生などについての新しい知識を得ることができる。

オ、想像力が刺激されて、スリルやサスペンスを味わうことができる。

カ、自分の読み方と友達のそれとを比較することで、別の、今まで気づかなかった解釈ができる。

キ、小説の読み方が身につき、自分で読むときに役立つ。

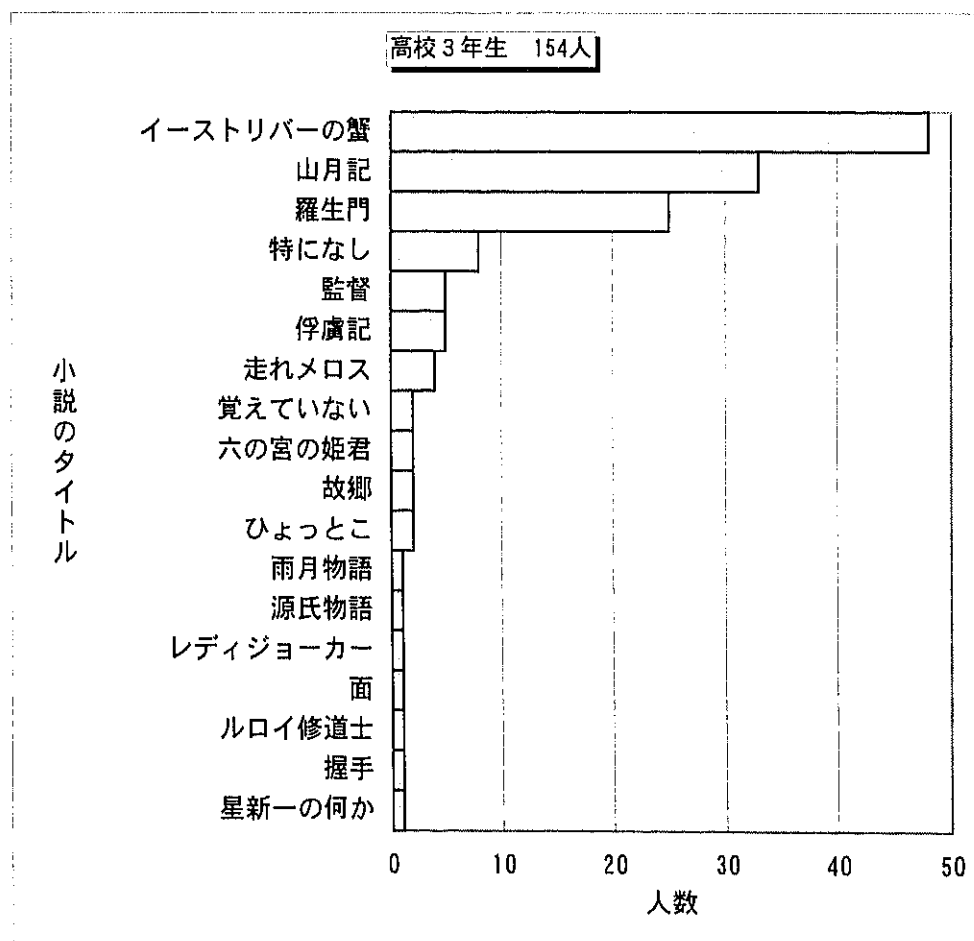
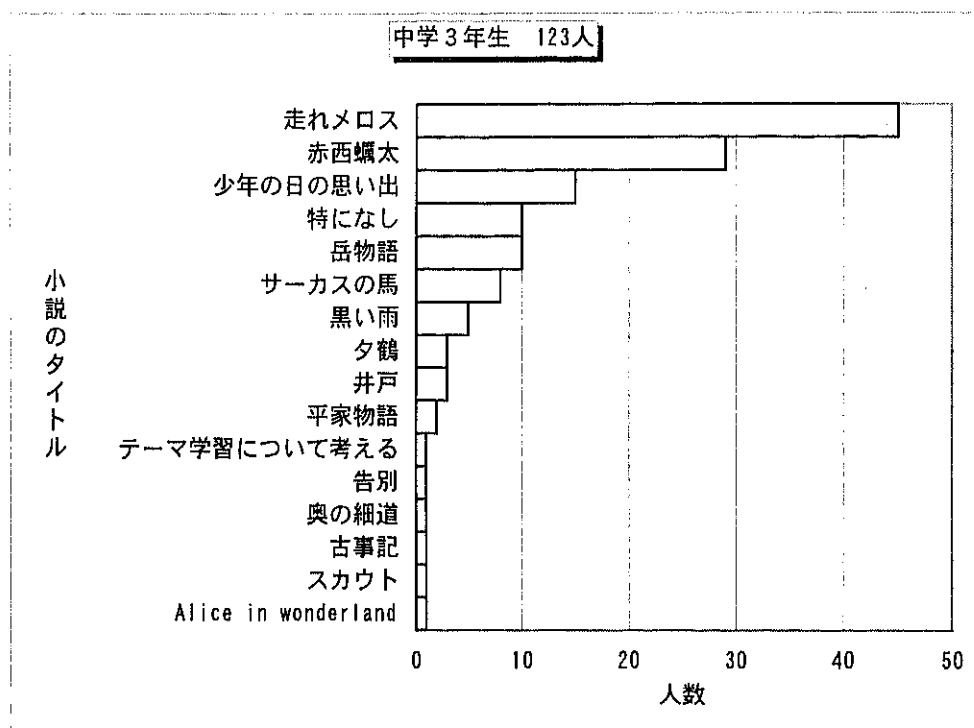
ク、先生の説明や助言で、作品を深く理解することができる。

ケ、有名な文学者についての知識を得ることができる。

コ、その他

サ、意義はない。

今まで授業で読んだ小説の中で、特に印象に残っている作品名とその理由を書いてください



「教室で読むもので、最も興味のあるのものは何ですか」のその他

《中学3年生》

- ・ 漢文
- ・ 古文（わかると楽しいから）
- ・ 物語（伏線とか細いつながりをみつけるのが面白いから）
- ・ 脚本（文からそのシーンを想像するのがそれなりに楽しいから）
- ・ なし（興味がないのに理由は無い）

《高校3年生》

- ・ エッセイ（短くて読みやすい）
- ・ 漫画
（手軽）
（セリフなしで語れるものがある言葉にすると野暮になる）
- ・ 随筆文論説文
（文章を通して論理展開や解釈について学べるから。面白いから）
- ・ 内容で

「教室で読むもので、最も興味のあるものは何ですか」の「理由」のその他

《中学3年生》

「説明文や評論文」

- ・ 興味があるから
- ・ 趣味

「小説」

- ・ 面白いから、自分が好きだから
- ・ 説明文や詩よりは面白いから
- ・ おもしろい(16)
- ・ 村瀬氏の髪型が七三になったから
- ・ 説明文や評論文は実は筆者の主観が入り込み偏った意見のものが多く(教科書の文章は特に)その筆者のだめさかげんがもろに出るから消去。詩歌は難しいし、あまりお目にかからないから消去。よって残るのは小説。
- ・ 登場人物の心情がおもしろい
- ・ 趣味
- ・ 一番楽しいから
- ・ 人生が広がるから
- ・ お手軽だから
- ・ 人の死戦争など普段考えないような事を身近に感じることができ、その問題について自分なりに考えることができるから
- ・ 楽しいから
- ・ 説明文や小論文は難しいし、詩歌は面倒だから

「詩歌」

- ・ その詩や俳句に込められた意味を読み取るのが面白い
- ・ わかんないから
- ・ ムードいいから

《高校3年生》

「説明文や評論文」

- ・ 自分にとって苦手な読み物であり、小説以上に一人で読む気が起こらないため
- ・ 自分から読もうと思うことはまったくないから希少な体験である

「小説」

- ・ 先生の授業は面白いから
- ・ 詩歌はキザすぎて歯が浮く
- ・ 読むことが好きだから
- ・ ストーリーがあった方が面白いから
- ・ ふだんは読まないから
- ・ 読んでいて面白いから(6)
- ・ 自分で読んだだけでは見えないものが見えてくる
- ・ 教養を得られるから
- ・ 読んで眠くなる(眠いときすぐ寝られるから)
- ・ 自分で読んだだけではわからない深いところまで読めるから
- ・ 気晴らしになるから
- ・ 塾や参考書は論説が多いので小説が新鮮。一人で読むとき論説は考えれば分かるが小説は内容の深みや文体の技巧に気づかずに読み過ぎてしまうことが多いから
- ・ 自分の知らない話のカタチを知るのは楽しい
- ・ 物語にひたれるから
- ・ テーマに関係なく読んで面白い。説明文や評論文は興味のあるテーマでないとキツイ
- ・ 国語という授業の特性が最も現れているように思えるから

「詩歌」

- ・ 凝縮されているリズムが味わえる
- ・ その雰囲気がいいから
- ・ 最も人間の感情を率直にあらわしているから
- ・ 友達の解釈の仕方が面白いから
- ・ 自分も詩人だから

「国語の授業で小説を読むことの意義（目的）は何だと思えますか（複数選択可）」のその他

《中学3年生》

- ・ ひまつぶしにもならない。むだ。ひま。生徒の気分を害することができる。
- ・ 日本語が分かる
- ・ 但しあまり達成されていない気がする

《高校3年生》

- ・ 作品中の人物の行動とその結果を分析することで実生活に役立つから
- ・ やな読み方は塾で
- ・ わからない
- ・ 自分では決して読まないジャンルの小説が読める
- ・ 本を読まない人に強制的に読ませることができる
- ・ やすらぐ
- ・ えらい人を「エライ！」と思わせしめ得る
- ・ 日本語のより正しい解釈、理解、使用の仕方がわかる

今まで（この学校で）授業で読んだ小説の中で、特に印象に残っている作品名とその理由を書いて下さい

《中学3年生》

「走れメロス」

- ・ この作品が呼んだ中では一番よろしいと思う。
- ・ 授業が面白く内容がまあまあ理解できたと思うから
- ・ 友情にひかれた
- ・ 冒頭が印象的だった、太宰の作品としては明るいことで有名だから
- ・ それしか覚えていないから
- ・ 昔自分が読んだときより授業のときのほうが深く読めたから
- ・ 先生の選んだものはほとんどおもしろい。
- ・ ブラックでよかった。
- ・ 授業がよかったから
- ・ 石川先生の解釈のしかたが非常におもしろかった
- ・ 他人と自分との価値観の違いがはっきり出たから
- ・ ナイス
- ・ 覚えているのがこれしかなかったから
- ・ はだかで走ってたから
- ・ 自分の思っていたのと違う読み方が出来たから
- ・ 小説の深さがわかった
- ・ 授業の進み方がよかったから
- ・ 深く理解できたから
- ・ 有名だから
- ・ これしか覚えていない
- ・ 印象に残ってるから
- ・ 石川先生の授業がとてもおもしろかったから
- ・ 先生がおもしろかった
- ・ 単にこれしか覚えてなかった
- ・ メロスとセリヌンティウスのラブコメディ
- ・ 今まで読んだ中で一番巧みな表現が用いられていたから
- ・ 授業がおもしろかったから
- ・ 違う解釈を知ったので
- ・ メロスのひたむきな文に感動した
- ・ 主人公が印象に残ったから
- ・ Because they're interesting!

- ・ 深いから
- ・ 作品を深く理解することができたから
- ・ はじめに考えていた解釈と授業を聞いた後にわかったものが違く、おどろいたから
- ・ それしか覚えてない
- ・ 展開がダイナミックで読んでいておもしろかったから
- ・ 読む前と読む後とでとても違った解釈ができたから
- ・ 作品として一番深いものを持っているから
- ・ 有名な文学作品でおもしろかったから
- ・ 表面的なものだけでなく授業によって深く読むことができた

=====

「赤西蠣太」

- ・ 先生の選んだものはほとんどおもしろい。
- ・ 面白かったから (6)
- ・ 一番後にやったから
- ・ 内容がしょうげき的だった (2)
- ・ 面白かった気がする
- ・ これしか覚えていない
- ・ 展開に意外性がある
- ・ 消去法
- ・ 著者の作品が好きだから
- ・ 志賀直哉という有名な小説家の文献にふれられたので
- ・ 話がスリルで面白くストーリーがよくできていたと思う
- ・ ストーリーが良い
- ・ 読んでいて集中できる作品だったから
- ・ 伏線がおもしろい
- ・ 最も面白かったし、展開が速かったから
- ・ 不器用な愛の描写がおもしろかったから
- ・ ラブストーリーだから
- ・ 主人公が印象に残ったから
- ・ Because they're interesting!
- ・ 内容に深みがあったから
- ・ 展開がダイナミックで読んでいておもしろかったから

=====

「少年の日の思い出」

- ・ 少年の成長がはっきりと読み取れるから
- ・ 終わり方が意外だった
- ・ 蝶をつぶしていくラストの少年の姿がショッキングだったから
- ・ 標本にされた蝶が不憫だ
- ・ 伏線がはりめぐらされている
- ・ 少年の感情が面白い
- ・ 少年の心のうつりかわりが描写されていたから
- ・ 主人公が印象に残った
- ・ 主人公が印象に残ったから
- ・ Because they're interesting!
- ・ 名言数々だから
- ・ 主人公の体験はだれにでも一度は経験するものであるから
- ・ なんかタッチがイヤだった印象に残ってるから
- ・ 半自伝的だから
- ・ 何か何となーく覚えている

=====

「井戸」

- ・ 井戸の結末は最高だ

=====

「平家物語」

- ・ 福田先生のすばらしい授業だったから

=====

「岳物語」

- ・ 面白かったから
- ・ 岳に共感できるので
- ・ 印象に残ってるから
- ・ 岳の気持ちがわからないでもないから
- ・ 岳と父親がおもしろいから
- ・ 岳の成長していく様子がよくわかる。以前によんだことがあった
- ・ 今まで読んだ中では面白かったから（授業中）
- ・ 知っている作品の新しい解釈が印象に残った

=====

「サーカスの馬」

- ・ 先生の選んだものはほとんどおもしろい。
- ・ 面白かったから
- ・ 主人公の心情が面白い
- ・ 感動した！

- ・ びょうしゃがよかった
- ・ ハッピーエンドだったから
- ・ 自分の趣味にあっていた
- ・ 馬に共感が持てたから（他にも理由はあると思うけどうまく表現できない）

=====

「スカウト」

- ・ 野球のことだし、どこかのほほんとしたところがあり、落ち着いたから

「古事記」

- ・ 福田先生のすばらしい授業だったから

=====

「奥の細道」

- ・ 福田先生のすばらしい授業だったから

=====

「黒い雨」

- ・ それしか覚えていないから
- ・ 深いから
- ・ その他の部分を読みたくなったから
- ・ 作品のつくり方のはいけい（日記形式）がわかってよかった
- ・ 描写がリアルだったから

=====

「こくべつ」

- ・ 授業でわからないところがわかったから

=====

「テーマ学習について考える」

- ・ テーマ学習について考えられたから

=====

「夕鶴」

- ・ 謎のラストまでの展開がいい
- ・ 展開がダイナミックで読んでいておもしろかったから
- ・ 授業方法がおもしろかった

=====

「特になし」

- ・ 一部分しかのっていなかったり、話が短かすぎたり自分の趣味にあわなかったりするから
- ・ 学校で読むレベルの小説には印象に残るようなものはない

今まで（この学校で）授業で読んだ小説の中で、特に印象に残っている作品名とその理由を書いて下さい

《高校3年生》

「イーストリバーの蟹」

- ・ 何となく
- ・ タイトルが印象的
- ・ 1つ1つの描写に秘められた意味のひも解きが楽しめた
- ・ 短い中に要素が多い
- ・ 美しい表現や登場人物の心理描写に感銘を受けたから
- ・ おもしろかったから (2)
- ・ 最近よんだから
- ・ 今までで最も技巧的に感じた、今までで最も深く読んだ気がする
- ・ 主人公の心情が共感できたから
- ・ 内容は面白く深いのに対し表現がひつこすぎて読んでてむかついてくる。表現におぼれている？！
- ・ 心情の変化が巧みでよかった
- ・ 他のものをあまり覚えていない。じっくりと読んだから。
- ・ 最近やったから
- ・ 表現が巧みな上、3ヶ月間読み続けたから
- ・ 最近読んだから (3)
- ・ Timely だから
- ・ 心理描写が巧み
- ・ あんなに深くまで小説を読みとることはその時までなかったから
- ・ 人物の気持ちがリアルで描き方も直接的ではないがよくわかったから
- ・ 現代文学で面白かったので
- ・ 面白かった、難しい描写がよくわかった
- ・ 現代社会の疲れきった姿を批判的に描きかつ非常に文学的な表現を用いている作品に久しぶりに（初めて？）出会い衝撃を与えられたから
- ・ 最近のものだから。授業で読みが深まったから
- ・ 自分と異なる他人の意見についていろいろな場面で考えさせられたから
- ・ 最近やったことと心情描写が細かく深く読めたから

- ・ 話の展開と結末がこれまで読んだものの中でも独特なものだったから
- ・ その生き方と運命は考えさせられる
- ・ 読む期間が長かったから
- ・ 衝撃的
- ・ 内面について考えさせられた
- ・ 短い作品だったけど心理描写を深く考えたし、自分なりに解釈して楽しめたから
- ・ 蟹がおいしそうに表現されていたから
- ・ 読みやすいわりにいろいろな内容が含まれていたから
- ・ 外見からして深そうな文学作品と違い軽そうな小説であるにもかかわらず様々な工夫（心情描写等）を発見できたから
- ・ 非常におもしろく感じたから
- ・ 若い頃の国語の授業に戻った気がして楽しかった
- ・ 意味深な表現が多いから
- ・ 人生や人間について広く深く考えられたから

=====

「山月記」

- ・ 主人公の生き方が読者に人生について考えさせるから
- ・ 人間の弱さが良く描かれていたから
- ・ 臆病な自尊心と尊大なしゅうち心
- ・ 深い (2)
- ・ 面白かったから
- ・ 心情に共感できる部分が多かった
- ・ 一度一人で読んだときには気づかなかったことが授業ではできてきたから
- ・ トラが恐かったから
- ・ 人間の内面が現れていると思ったから
- ・ 面白かった、難しい描写がよくわかった
- ・ あまりにも現実とかけはなれていたから
- ・ やや難解だったが格調高く構成されていたから
- ・ 内容にインパクトがあるから
- ・ 読む期間が長かったから
- ・ 内面について考えさせられた
- ・ 読みごたえがあったから

- ・ 主人公に共感できたから
- ・ 深かった、愛もあった
- ・ 文体
- ・ インパクト満点
- ・ 主人公に自分を投影することで山月記が実感を伴ったものになったから
- ・ 自分について深く考えるきっかけとなったから
- ・ 斬新だった（虎になるのが）
- ・ おもしろかった、内容も授業も
- ・ 漢籍に興味を持った
- ・ 両者ともに古典から題材をとっていながら独自の世界観を形成していたから
- ・ 人生や人間について広く深く考えられたから
- ・ 人間の内面を深くえぐりつついるから
- ・ 人が虎になったから
- ・ 「リアリティあり」だったから
- ・ 自分やその周りと重なる部分があったから

=====

「羅生門」

- ・ 短い中にも深いところがあったから
- ・ 国語を嫌いになった原因だから
- ・ 罪と悪に絶対はないという結果が印象に残った
- ・ 美しい表現や登場人物の心理描写に感銘をうけたから
- ・ よくわからない
- ・ 下人や老婆の倫理を超えた生きるパワー
- ・ この世のものとは思えない描写にひかれたから
- ・ この学校で最初に取り組んだ小説だから
- ・ 読んでいるうちに頭の内に場面という映像みたいなものが浮かんできたから
- ・ 登場人物の心情の変化が激しく印象深かった
- ・ 読み深めていくと深かった
- ・ 後味の悪さが忘れられない
- ・ 深い
- ・ 短いのに深く読んだ気がするから
- ・ 有名
- ・ 面白かったから
- ・ それ以外覚えてない
- ・ 幻想的だった
- ・ 有名な書物とされるものを初めてよんだから
- ・ 自分について深く考えるきっかけとなったから
- ・ その後どうなったのかがむしように気になる
- ・ 登場人物など設定が印象的だったから
- ・ 両者ともに古典から題材をとっていながら独自の世界観を形成していたから

- ・ 余韻のある結末だったこと

=====

「ひよっとこ」

- ・ 共感できたから
- ・ 自分が意見を言ったのに強引に授業が進んだから

=====

「星新一の何か」

=====

「握手」

=====

「2年のときにやった戦争のやつ（戦場でのやりとりを回想したもの）」

- ・ なんとなく
- ・ 表現が巧みだったので

=====

「走れメロス」

- ・ 世間一般で評価されている作品だが内容は自分ではあまりすごいとは感じずにそのことが印象に残っている

- ・ 意図がまったく理解できなかったのが未熟で理解できなかったのか、それとも単に何もこめられていなかったのかもう一度読んでみたいと思っているから

- ・ 面白かったから
- ・ 深い解釈が得られた気がしたから

=====

「俘虜記」

- ・ 今までに読んだことのない種類の小説だったから

- ・ 面白かったから
- ・ つづきが気になる

=====

「ルロイ修道士」

- ・ 人間の生き方と去り方を感じたから

=====

「面」

=====

「故郷」

- ・ 授業内容はよく覚えていないが、いたく感銘を受けた記憶がある。それに同意してくれる人たちが多かったため余計そういう感が強い

=====

「六ノ宮の姫君」

- ・ 古文と芥川の比較が面白かった

=====

「レディージョーカー」

- ・ おもしろかった

=====

「監督」

- ・ 趣味
- ・ 面白かった
- ・ 衝撃的
- ・ 野球がすきだから
- ・ 共感をもった覚えが

=====

「源氏物語」

=====

「雨月物語」

=====

「特になし」

- ・ 自分で選んだ本の方が印象に残ります
- ・ 初めから終わりまで全て扱ったものが少ないので特になし
- ・ 学校で読むと小説がブツ切りになってしまうか短編しか読めないのが印象に残りづらい
- ・ おもしろくなかったから
- ・ 学校で読んだ小説のなかでは印象に残っているものはない
- ・ 自分にはあわなかった
- ・ 強い印象をあたえるものがなかった

=====

「覚えてない」

- ・ 授業がこじつけっぽく、つまらないから

小説に関するアンケートの考察

1ヶ月に何冊（小説のみ）読みますか

中学3年では「1～2冊」が半分以上だったが、これは9月に調査したため、夏休みが影響しているようだ。別の時期ならもっと少ないのではないか。

高校3年の「読まない」が約半数は、別の時期なら（9月に実施した）もっと多かったのではないか。

教室で読むもので最も興味のあるものは何ですか

この結果は予想通りで、「小説」が圧倒的に多かった。その理由として、中学3年では「具体的・実感的で共感しやすいから」と「人間や自分について内省的に考えられるから」が同数で上位。次が「その他」だった。「その他」のなかには「面白いから」が16名いたが、これは、ストーリーの展開や人物の心情を指しているようにも思われる。

高校3年では「人間や自分について内省的に考えられることができるから」が多く、中学3年より自分を見つめることが多いように思われる。（精神面で成長している、ということか）また「その他」で、「自分では読まないから」「授業では深く読めるから」など自身の成長、教養といった面から小説をとらえている生徒がいることがわかった。

国語の授業で小説を読むことの意義（目的）は何だと思えますか

ここで、中学生と高校生の違いがはっきり出た。

「自分の読み方と友達のそれとを比較することで、別の、今まで気づかなかった解釈ができる」が中学3年では6位（26名）なのに対して、高校3年では1位（77名）、半分ちかくが挙げていた。

中学3年といえば、学校生活にも慣れて、いちばんの生意気盛り。特に本校の生徒は自意識が強く、自己主張も強い。自信家も多い。（反面、もろさもあるか）

ところが、3年たって大学入試がチラついてくると、イヤでも自分を相対化せざるを得ない。全体のなかでの自分を意識する。その結果として他者に対する受容・寛容の態度が出てくるのか。あるいは自己を客観視すれば、当然の結果か。

今まで授業で読んだ小説のなかで、特に印象に残っている作品とその理由を書いてください

中学3年では、トップが「走れメロス」で45名。（37%）これは、1年前の2年生のときに読んだもの。その理由として「先生の解釈が面白かった」「深く読めた」があわせて15名。「作品の良さ」「友情にひかれた」があわせて8名だった。このときの担当者はこの作品を従来からある「ふたりの友情物語」とせず、「人間くさい、ふてくされるメロス」を強調し、「これこそ人間のありのままの姿で、そのことを作者は描きかかったのではないか。」——とまとめた。それが印象に残ったのだろうか。

高校3年は1学期に読んだ「イースト・リバーの蟹」がトップだった。

アンケート全体をとおして、①小説の人気は高いこと。②「小説を読む意義」で、中学と高校のちがいははっきり出たことが特筆されるだろう。②は、それぞれの学年で授業形態を考えるうえで、また、ポイントの置き方を考えるうえで、参考になりそうだ。たとえば、高校では各自の考え、（意見）を多く述べさせ比較・検討させる活動が有効かもしれない。

小説における価値

桑原武夫編「文学理論の研究」より

- ① 特定の時代の社会が反映されていること。
- ② 人生に関する知識が供給されること。
- ③ 人間がよく表現されていること。
- ④ 他人の秘密をのぞき見る感じのあること。
- ⑤ 人生や社会についての発見があること。
- ⑥ 人生いかに生きべきか、が示されていること。
- ⑦ 人生への意欲が増進されること。
- ⑧ 作中人物への共感をおぼえること。
- ⑨ 言語表現が巧みであること。
- ⑩ 自然描写の美しいこと。
- ⑪ 漠然と感じていたことに的確な表現があたえられること。
- ⑫ 魅力のある異性が描かれていること。
- ⑬ 日常世界からの離脱が経験されること。
- ⑭ 想像力が刺激されること。
- ⑮ ユーモアのあること。
- ⑯ スリルとサスペンスのあること。
- ⑰ 多様な生き方が同時に表現されていること。

巻頭の『イースト・リバーの蟹』は、「べとべとした人間関係」が、「生理的にきらい」な商社の元副社長に生臭い出番がやってくる話である。どちらかと言うと、退くことを好むこの元副社長は、社長の椅子をめぐる争いから降りて、いまは別のポストに就いていた。ところが、社長となった同期の人間の急死で、再び闘争場裡へ引き出されようとする。

自らのスタイルだけにこだわって、「上るのもいっしょなら、奈落の底へ落ちるときも副社長といっしょ」と自分がかついでできた部下たちを見捨てていいのか。

揺れる気持がないわけではない。

「成功は欲望・決断・献身によって得られる」という言葉に、なるほどと思ったこともあった。しかし、もうひとつ、自分はギラついた気持になれない。

「いま一度野心を」と促しに来た部下に、ふだんは客を喜ばない妻が「イースト・リバーの蟹」を料理して、振舞う。

他人を押しつけてまで社長になろうとしない人間を、ただ、さわやかな人間として称揚していないところに、この作品の価値がある。現実にはこうした人たちが退いたために、多くの日本企業がバブルにまみれてしまったのではないか。この作品が書かれた八四年には、まだ、バブルは始まっていないが、ある意味で、これはその危機を予知した作品だとも言える。

「テーブルの上では、蟹の甲羅揚げがすっかり冷えてしまっていた。もはや、ばらばらとなった小さな死体でしかない。オレンジ色は褪せ、にじんだ緑もどす黒く変色している。大都会の傍を流れる川の生物にふさわしい醜い死体である」

詩人としてその文学活動を開始した城山の鋭い言語感覚によってキャッチされた蟹のイメージが、いわば鮮やかな「効果音」となってこの作品を盛り上げる。こんな傑作がいままで眠っていたことが信じられないほどである。

この元副社長は娘に「どうしてもということが言えないひと」と決めつけられるが、城山自身がそうであり、退くことを好むだけに、この作品も『週刊宝石』に発表されたままになつていたのである。

城山三郎は「裏切られた皇国少年」である。「戦後余生の連続として」というエッセイに城山は「裏切りへの予感、ひもじさへの予感、死への予感。人生にたよるべきものなく、人生に多くを望んではならぬと、自分自身に言い聞かす。万事に禁欲的、逃げ腰の生き方が、性に合う。強く信じられない、強く生きられない。その実感をどうしようもない」と書いている。

また、あるインタビューでは、
 「取り残された人とか遅れた人とかの哀感のようなものが好きです。作品で言うと、シャーウッド・アンダーソンの『ワインズバーグ・オハイオ』。オハイオ州にある架空の町が舞台で、野心のある者はニューヨークなどの大都会に出て行って、取り残された人びとのしんみりとした物語。こういうの好きなんです。同時に一方では、無償の行為とか、償われなくても自分の信じることには命まで投げ出すというような生き方をした人に強く惹かれます」

と語っている。

(文庫本解説より) 佐高 信

高校三年現代文 一学期末考查問題

別紙の小説を読んで、次の問いに答えなさい。

- 一 ― ア「だが……」の後を続けるとどうなりますか。一文で書きなさい。
- 二 ― イ「園子が珍しくいそいそと料理をつくっている様子である」と ― ウ「岩堀の心はゆれた」で、次の問いに答えなさい。
 - a 「いそいそと」の意味を書きなさい。
 - b この二つの文が並んでいる（隣り合っている）理由をこの直後の内容と関連づけて述べなさい。
- 三 ― エ「禅譲」の意味を書きなさい。
- 四 ― オ「心外であった」とありますが、どのようなことに対してですか。
- 五 ― カ「園子はうなずき」とありますが、何故そうしたのですか。
- 六 ― キ「今夜は副社長といわせて下さい」とありますが、何故この呼称にこだわるのですか。
- 七 ― ク「しかし」は逆説の接続詞ですが、何の逆説になっていますか。
- 八 ― ケで、「一線を退く」と「一線を画す」の意味の違いを述べなさい。また、言い換えた理由も述べなさい。
- 九 ― コ「すわった目」と ― サ「御馳走のせいにして」の意味を書きなさい。
- 十 ― シ「下りとわかって、みんなが次々と降りて行っても乗り続けてきました」とは、具体的にはどういうことを指していますか。
- 十一 ― ス「どなるように」にはどのような気持ちが表されていますか。
- 十二 ― セ「肩を落とした」理由を岩堀の言葉と結びつけて述べなさい。
- 十三 ― ソ「微笑して」とありますが、何故そうしたのですか。
- 十四 ― タ「希望まで」の「まで」と同じ意味・用法のものはどれですか。
 - a 夏までには完成する。
 - b 風ばかりか雨まで降ってきた。
 - c まずは報告まで。
 - d わざわざ行くまでもない。
 - e 成功と言えないまでも失敗ではない。
- 十五 ― チ「ふっと気づくこと」とはどのようなことですか。

また、希望以外に奪ったものは何ですか。

 - a 今夜、ゴルフの話が出なかったこと。
 - b 小野寺が思いがけないプレゼントをくれたこと。
 - c 社長の死ぬずっと前からの小野寺の思いを実感できたこと。
 - d ふたりで声をあわせて英文をよんだこと。
- 十 ― ツ「岩堀の顔がかすかに明るくなった」で、このときの「思い」を具体的に述べている文をこれより後から探して、その始めの六文字を書き抜きなさい。
- 十七 ― テ「献身」とありますが、この小説ではどのようなことが該当しますか。